

SPACE JAPAN BOOK REVIEW

衛星通信研究者が見た

Reviewer: 編集顧問 飯田尚志



ジョージ・フリードマン, 櫻井祐子訳: "100年予測 世界最強のインテリジェンス企業が示す未来覇権地図", 早川書房, 2009.
(原本) George Friedman: "The Next 100 Years A Forecast for the 21st Century", Doubleday, 2009.

本書は、その題名が大きいことと、読んでみて、今まで我々が思ってもみなかったような予測が多く語られていて新鮮な印象を与える。その中で最も印象的なのは、アメリカの繁栄はまだ始まったばかりで、21世紀はアメリカの時代の幕明けであるということである。アメリカの黄昏とかの本が多くある中で(例えば参考文献[1]), 本当かなと思うこともあるが、著者はあくまで地政学的観点から解析している。そもそも地政学とは何なのか。広辞苑によれば政治現象と地的条件との関係を研究する学問であり[2], もう少し現代的に Wikipediaによれば地理的な環境が国家に与える政治的, 軍事的, 経済的な影響を巨視的な視点で研究するもので, イギリス, ドイツ, アメリカ等で国家戦略に科学的根拠と正当性を与えることを目的としたものとのことである[3]。では何故本書を本欄で取り上げるかという後述のように宇宙に関する記述があるからである。それでは早速紹介しよう。

本書の著者は、ルイジアナ州立大学地政学研究センター所長などを経て、1996年にインテリジェンス企業 STRATFOR を創設し、政治、経済、安全保障にかかわる独自の情報を提供し、「影のCIA」の異名を持つ企業をCEOとして率いている。その顧客は世界中の一流企業からアメリカ政府機関や外国政府まで幅広いということである。

まず、これからどうなるのか我々が憂慮するイラク、アフガン戦争については、これらの戦争に勝つ必要はなく、ただ状況を混乱させ、イスラム圏が纏まってアメリカに挑戦するだけの力をつけさせなければそれで十分であるというものである。これが地政学から出てくる結論のようだ。

ここからが地政学の発揮となり、アメリカの繁栄は強大な軍事力、特に海軍が世界の海の制海権を握っていることからくるということである。そして、21世紀末にはメキシコがアメリカに対抗する国になるが、21世紀半ばに、アメリカに対抗する国は、日本、トルコ、ポーランドであるというのも衝撃的である。理由としては、中国はGDPは伸びるが、日本のバブル期のように真の資本主義ではない(コネとか情実が優先する)ので、不良債権が25%もあると見積もられるため、高成長が続かない限り国の経済は維持できず、高成長はいつまでも続かないから将来はアメリカの脅威とはならない。ロシアは、21世紀初めにアメリカに対峙し、第2次冷戦の火種を提供することになるが、深刻な国内問題や人口の激減、貧弱なインフラを考えれば、ロシア崩壊をもって第2次冷戦は終結すると見られる。

それならば、何故、トルコか、ポーランドか、日本かであるが、詳しくはお読み頂くとして、そこが地政学から導かれる結論ということである。その理由を短く記すと、日本については、軍国主義の歴史を背負う日本がそのままではいられず、深刻な人口問題を抱えながらも、大規模な移民受け入れに難色を示す日本は、他国の新しい労働力に活路を見出さざるを得なくなる。いずれ政策転換を迫られるだろう。

トルコについては、歴史上の主要なイスラム帝国は、すべてトルコ人によって支配されていた。オスマン帝国は第一次世界大戦末に崩壊したが、トルコは混沌の中の安定した土台であり、経済力と軍事力ですでに地域最強を誇る。今後さらに力を蓄えるにつれて影響力を強めていくだろうとのことである。そういえば、我が国のGDPが3位になったばかりで

なく、このままだと 2021 年にトルコに抜かれるということで[4]、トルコが大きくなることは確かなようである。

ポーランドは 16 世紀を最後に大国の座から滑り落ちたが、確かに大国であったし、今後再びその座を取り戻すものと考えられる。その理由は、ドイツの衰退である。また、ロシアが東方からポーランドに圧力をかけるが、ポーランドは、ロシアに立ち向かう同盟国の盟主になるだろう。

このように日本、トルコ、ポーランドのそれぞれが、ロシアの二度目の崩壊後さらに自信を深めたアメリカと対峙するというわけである。やがて、2050 年に日本がアメリカと戦争を起こし、それは月面を含む宇宙戦争となる。ここが、宇宙に関係するところであるが、やや荒唐無稽と思える部分でもある。宇宙戦争の概要は次のようである。つまり、日本はアメリカの海洋支配に対抗するため、アメリカの軍の要であるバトルスターと呼ぶ宇宙プラットフォームを日本が月面に作った秘密の軍事基地から奇襲攻撃をかけることから始まる。しかし、この戦争はすぐに敗れることになるというものである。

また、本書には、科学技術は戦争によって飛躍的に発展することが強調されている。本書の読了後、地政学的に考えると「成るほど。」というような気になる。本書についての新聞紙上書評には文献[5]がある。

参考文献

- [1] 進藤栄一: "アメリカ黄昏の帝国", 岩波書店, 1994年.
- [2] 新村 出編: "広辞苑 第二版", 岩波書店, 1971年.
- [3] Wikipedia: 地政学
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%B0%E6%94%BF%E5%AD%A6>
- [4] 畠山 襄: "GDP 3 位の日本 攻勢かけないと転落一途", 朝日新聞, 2011年1月26日.
- [5] 斎藤 環: "読書 売れてる本 100年予測 世界最強のインテリジェンス企業が示す未来覇権地図 ジョージ・フリードマン〈著〉 地政学だけが知っている", 朝日新聞, 2010年4月13日.

【コメント】

このような先の予測を、米国の有力機関が真剣に行っていることの凄さを感じざるを得ない。我々の国では政治家や役所の「将来の仮定のことを今申し上げるのは不適切で、それが起こった時に考えて適切に処理したい」という言葉が当たり前のように通用しており、この「先のことを必死になって予測し、どの場合にも備えて予め対策を立てておく」習慣・能力の差こそが、もしかすると経済力、財政力、技術力など、いま目に見える差を増幅し、はるかに大きな国力の差を作りだす源になっているのではないかと感じる。この本はその意味で日本の政・官の心ある方全員に読んで頂きたいものである。(編集顧問 植田剛夫)